

明治期以降曹洞宗人物誌 (三)

川口 高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第五十八巻第一号（平成二十二年七月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（二）」の続編で、「あ」項の続きである。全項の人物誌が完成した時は『近・現代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざし精進している。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降の顕著な業績を残した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に各種雑誌や著作などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。
- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げ

四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、五十音順に配列した。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては歴住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編者が直接、歴住地へ問い合わせを行った返書にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初筆）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地は、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないのがほとんどである。
- 六、歴住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

あぜがみーばいせん 畔上樸仙

文政八年(一八二五)ー明治三十四年
(二九〇一)

長野県興隆寺十七世、長野市大林寺二十一世、前橋市龍海院三十世、長野市長国寺二十八世、南足柄市最乗寺独住一世、總持寺独住二世。号は大岡、隨時道人。禪師号は法雲普蓋禪師。文政八年七月十五日に信濃国下高井郡夜間瀬村字宇木の清水家に生まれる。母は畔上氏。受業師は微山活英。本師は活宗。下総国結城町孝頭寺の月山、相模国愛甲郡萩野村松石寺の国穩や信濃国松代の長国寺や一圭や覚巖、東京吉祥寺の愚禪らに参随した。天保十二年(一八四一)夏に信濃泰清寺の継宗の会で版首となる。弘化四年(一八四七)に駒込梅檀林に入學し、研学の傍ら吉祥寺の愚禪に参じて修行にはげんだ。嘉永四年(一八五一)に梅檀林の越後寮へ入り寮主となる。嘉永五年八月には永平寺に瑞世し、安政三年(一八五五)二月には相模国早川海蔵寺の月潭に随侍参禅した。五年七月十八日に信濃興隆寺に任職する。以後、各地の寺院において経

論を講じた。六年夏に信濃国英岩寺の結制で後堂を務める。七年夏には信濃国長国寺

結制の後堂、万延二年(一八六一)夏に越後国普門寺結制の後堂、文久二年夏に信濃国泰清寺結制の後堂を務めた。同年夏、首先地興隆寺で初会結制江湖会を修行し『永平清規』を講じている。慶応三年(一八六七)四月一日には松代の大林寺へ転住し、同年夏、信濃国常昌寺の結制で西堂、明治元年(一八六八)冬に信濃国興禪寺の結制でも西堂を務めた。二年十月三日に前橋の龍海院に任職し、五年五月十二日には権訓導に補任され、十月三日には長野市長国寺へ転住した。六年の夏、三河国真光寺結制の西堂を務め、七年十一月七日には本山特選により神奈川県最乗寺の独住一世となった。八年十二月二十日に権少教正に補任され、九年六月二十八日には神奈川県専門学校支校教師に任命された。十三年二月十六日には總持寺へ晋住し、大教正に補任せられた。十四年四月一日には曹洞宗管長を務め、二十五年に両本山の分離独立を提唱し議論をかもし出した。二十九年には長野県

に永寿院を開いている。『円明国師御伝』、

『坐禅用心記落草談』、『信心銘拈提落草談』、『総持開祖御伝抄』、『総持開祖御教義抄』、『戒中直壇手扣』、『仏戒落草』などを著わしており、三十四年十二月二十七日に東京都林泉寺の隠寮にて七十七歳で示寂した。(『総持寺誌』、『洞上高僧月旦』)『通俗仏教新聞』第三八九号)

あだちーぎじゅん 足立宣淳

ー大正十三年(一九二四)

兵庫県水上郡普蔵寺十七世、逗子市海宝院二十二世。号は明道。兵庫県水上郡芦田村西芦田に生まれる。曹洞宗神奈川県第二宗務所長として宗運の拡張に貢献し、地方布教部委員長として宗義の宣伝に努めた。大正十三年五月十一日に八十三歳で示寂した。

あだちーしゅうほう 足立宗法

明治元年(一八六八)ー昭和十四年(一九三九)

豊岡市養源寺二十九世、静岡県周知郡崇信

寺。号は興山。明治元年十一月二十六日に愛知県海部郡佐織村字五軒屋の伊藤家に生まれる。受業師、本師は足立泰慶。十四年十一月、真如寺の足立泰慶について得度し、十六年冬に龍泉寺の木村桂鳳初会に入衆、二十一年夏に大洞院久林養洲の常恒会にて立身、二十二年十一月には足立泰慶に嗣法する。二十九年七月に曹洞宗大学林を卒業し、日置黙仙に随参した。二十九年十月に能本山で瑞世転衣し、三十四年八月には崇信寺に住職した。二十九年八月から曹洞宗大学林寮監を務め、三十一年から三十三年まで第二十五中学林教授を務める。可睡齋講師、監寺、副寺、師家も務める。大正六年(一九一七)六月に曹洞宗議会議員に当選した。前年の五年十一月には總持寺慶弔式礼单頭、十三年二月には總持寺授戒会教授師、昭和九年(一九三四)三月に大遠忌財務整理委員、總持寺再建勸募委員長、宗務所長などを務めた。十四年二月二十一日に七十二歳で示寂した。(養源寺歴住世代帳『曹洞宗名鑑』)

あだちーたつじゅん 安達達淳

文政五年(一八二二)ー明治三十七年(一九〇四)

大町市靈松寺三十世、長野県北安曇郡源長寺十八世、岡山県真庭郡極楽寺十三世、井原市徳聖寺、東京都慶安寺、松本市生安寺二世、松本市全久院二世、南安曇郡金松寺二世、自性庵及び龍昌寺を開山する。号は玉翁。文政五年十一月二日、越中富山千石町の安達達翁の子に生まれる。姓は清水であったが、後に安達と改名。受業師は活(豁)翁達禪。本師は達元智翁。嘉永三年(二八五〇)夏に越中国富山海岸寺の菜洲の会に入つて首座を務め、同年冬には美作国大庭郡三崎村の極楽寺に首先住職する。六年には總持寺に瑞世する。同年冬には備中国徳聖寺に転住し開単する。安政元年(二八五四)には能本山役局に任じられて江戸へ行き、下谷池之端の慶安寺に住職した。文久三年(一八六三)には信濃国北安曇郡大町の靈松寺に住職する。慶應二年(二八六六)より三年まで總持寺に輪住し、明治元年(一八六八)には永平寺が総

本山論を主張したため、京都表出役を任命され、在田彦龍とともに奔走した。六年には筑摩県曹洞宗録司に任命されており、教部省の訓導、中講義、大講義に補任された。四年頃に起つた松本藩の廃仏の暴政に対して憂憤し歎訴した。二十五年二月には在田彦龍らとともに宗門永遠の治安策として能本山分離独立案を建言し、顧問役を務めた。『妙明心源略鈔』、『曹洞宗革新論』などを著わしており、三十七年三月九日に示寂した。(水野靈牛『開門二十五哲』、『水月音容』)

あだちーてんりゅう 阿達天龍

慶應三年(一八六七)ー大正十三年(一九二四)

新潟県東蒲原郡多宝寺第十九世。慶應三年一月二十八日に新潟県東蒲原郡両鹿瀬村に生まれる。本師は丸山威音。明治十二年(二八七九)冬、新潟県中蒲原郡横越村の円通寺住職塚原快堂の随意会に入衆し、二十年、新潟県専門支校に入学。二十二年夏、北蒲原郡赤坂村の観音寺千葉良壽の片

法幢会で立職する。同年十月二日に多宝寺丸山威音の室に入り嗣法し、翌二十三年一月十七日、多宝寺に首先任職した。二十四年九月七日に總持寺へ瑞世し、三十四年夏、初会法幢を建立する。二十七年に組合総代に選挙されて以来二十年間、組長を務めた。地方布教部布教師も務め、大正十三年六月五日に五十八歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あだちーどうじゅん 安立洞順

明治五年(一八七二)―大正十五年(一九二六)

兵庫泉水上郡宝林寺十三世、武生市宝円寺三十四世、兵庫泉水上郡佐治村法光寺。号は天涯。明治五年七月十二日に越前南條郡武生町に生まれる。受業師は能山寛山あるいは大洞海順といわれる。本師は能山寛山あるいは覚印海天。日置黙仙、西有穆山に参随する。明治十八年(一八八五)冬、近江高島郡朽木村の興聖寺橋本台嶺の片幢会に入衆し、二十年夏、宝円寺で立身する。専門支校本科五級を卒業。二十七年に教導

講習院を卒業し、二十六年十月に永平寺で瑞世転衣した。三十一年一月に法光寺へ首先任職し、同年二月には宝林寺へ転住する。三十八年より両本山布教師、宗会議員を務め、大正十五年に五十五歳で示寂した。

あだちーふみよう 足立普明

万延元年(一八六〇)―明治三十六年(一九〇三)

丹波国何鹿郡以久田村高台寺六世。宮城県亘理郡大雄寺三十一世。万延元年八月五日に京都府下丹波国天田郡福知山城下で、父足立小右衛門某の次男に生まれる。号は圓界。受業師は祖覚省拙。本師は諦印愚観。京都府第二号曹洞宗専門学支校に入学する。明治十一年(一八七八)夏、久昌寺隨意会で首座を務める。能仁柏巖に参随する。十八年(一八八五)高台寺に住職せられ、救世館を創立、四恩社を組織した。二十一年に曹洞扶宗会の大会議が東京に開設される際、京都府第一号取締代理となる。同年六月には、大阪に関西有志会を組織

し、宗弊矯正の謀議に努めた。宗粋社を創成して「第一義」と題する雑誌を刊行した。二十五年には「如是」を発行して主筆となり、政教問題の論究に努めた。二十六年九月には能山議会議員選挙投票開緘係、能山議会議記にも任命される。能山独立運動に参加する傍ら、『耶穌教亡国論』『天理教信ずるに足らず』『宣戰詔勅衍義』を著わしたが、二十九年二月五日に台湾、澎湖列島への特派布教に派遣され、三十六年九月九日に中国廈門の鳳山寺において示寂した。(『洞上高僧月旦』、水野靈牛『現時二十五哲』川口高風『近代の肖像』第一四八、一四九回)

あつみーぎよくみよう 厚見玉明

安政六年(一八五九)―大正十三年(一九二四)

東松山市宗悟寺二十一世、入間川町安穩寺、入間川町天岑寺。安政六年二月二十五日に東京府北多摩郡調布町の原因忠司三男に生まれる。受業師は大寺弘明。本師は厚見玉峰。明治五年(一八七二)十月、西光

寺の大寺弘明について得度、同年冬、川越

養寿院の守慶良宗会下に首先安居、十一年冬、入間郡龍穩寺の即法の常恒会で立職、

十五年、川越の専門支校を卒業。十二年四月に厚見玉峰の室に入って嗣法し、二十六年二月に永平寺で転衣し、同年十二月には入間川町の安穩寺に首先住職した。三十一年三月、入間川町为天岑寺へ転住し、四十二年九月には宗悟寺に住職した。二十年より三十五年まで地方小学校、中学林、高等学林の学監、教授、地方布教部委員長などを務めた。大正十三年三月二十二日に六十六歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あつみーじゅんみょう 厚見純明

明治二十二年(一八八九)ー昭和四十一年(一九六六)

狭山市天岑寺二十六世。号は天海。明治二十二年に埼玉県東松山市で生まれた。大正十一年頃、鐘樓堂を新築しており、昭和四十一年四月二十六日に七十八歳で示寂した。

あなみずーしょうゆう 穴水正雄

明治三十九年(一九〇六)ー昭和五十四年(一九七九)

湖西市正太寺十七世。号は雪英。明治三十九年一月十一日に静岡県湖西市入出に生まれる。受業師、本師は穴水秀賢。大正十四年(一九二五)世田谷中学校を卒業し、同年より昭和三年(一九二八)三月まで總持寺に安居する。四十四年に静岡県第四宗務所副所長を務め、その他、入出村長、農業委員、社会教育委員、村議会議員、民生委員、入出農協専務理事、湖西町子供会長、入出児童館長、入出区長、湖西市仏教会長、浜名郡仏教会長などを歴任する。昭和五十四年一月三日に示寂した。

あびこーこうどう 安孫子孝童

ー昭和十六年(一九四一)

敦賀市永厳寺三十七世。明治四十五年(一九一二)二月に若狭の玉泉寺より晋住した。号は黙仙。敦賀市の安孫子家出身。『道元禪師行状記』の木版を再版して永平寺へ献納。昭和十六年七月九日に六十歳で

示寂した。

あびこーとくぜん 安孫子得禪

明治九年(一八七六)ー昭和二十三年(一九四八)

宮城県柴田郡宝泉寺十五世。号は宝林。明治九年一月十七日に山形県北村山郡大倉村大字揃山に生まれる。受業師は安孫子得秀。本師は安孫子得仙。明治二十二年(一八八九)夏、山形市龍門寺の今野玄濤の片法幢会に首先安居する。以後、独学で自修し、繁昌院の菊池大仙に十一年間随侍して宗乗、余乗などを学んだ。三十二年四月、柴田郡富岡村の龍雲寺の安孫子得仙の室に入って嗣法する。三十五年七月、宝泉寺に首先住職し、三十九年三月には總持寺において転衣し、同年冬には初会法幢を建てた。三十五年から宮城県第三宗務支局書記、会計、庶務、地方布教委員などを務め、昭和二十三年三月三日に七十二歳で示寂した。

あびこーほくしゅう 安孫子北宗

弘化四年(一八四七)ー大正七年(一九一八)

富山県氷見郡光禅寺四十八世、長野県諏訪郡福寿院。号は祖山。弘化四年五月十三日に生まれる。受業師及び本師は安孫子玉英。富山県第二曹洞宗務所長として宗運の興隆に努めた。大正七年十月十三日に示寂した。

あべーじおん 阿部慈園

昭和二十二年(一九四七)ー平成十三年(二〇〇一)

鎌倉市黙仙寺五世。号は大覚。昭和二十二年七月三十日、新潟県西蒲原郡分水町に生まれる。受業師は阿部秋好。本師は花本貫瑞。四十五年(一九七〇)三月、駒澤大学仏教学部卒業。五十三年三月、印度プーナ大学院修了。五十六年三月、東京大学大学院博士課程(印度哲学)単位取得。五十四年十二月 Ph. D (Pune University) の学位を受ける。平成元年(一九八九)第五回東方学術賞奨励賞、三年、第二十八回日本翻

訳文化賞を受賞する。昭和五十六年東方研究会専任研究員。東方学院非常勤講師に就く。五十七年日本大学文理学部、五十九年

法政大学文学部、六十年放送大学哲学科、六十二年駒澤大学仏教学部、平成元年明治大学文学部及び駒沢女子短期大学英语英文科などの非常勤講師を務める。三年明治大学文学部専任講師となり、五年に助教授、十年には教授を務めた。十二年東京大学文学部非常勤講師にも就いている。著書に『頭陀の研究』『原典で読む』『インド仏教文化入門』『比較宗教思想論』などがある。平成十三年一月二十四日に五十四歳で示寂したため、追悼論集『仏教の修行法』が刊行された。

あべーしゅうこう 阿部秋好

大正十一年(一九二二)ー平成十一年(一九九九)

さいたま市興徳寺三十二世、新潟県分水町吉田寺二十四世、岡山県現福寺十八世。号は耕雲。大正十一年(一九二二)九月七日に鳥取県東伯郡灘手村谷(倉吉市)に仲本

政蔵・かめのの二男として生まれた。受業師は東雄道、本師は花本貫瑞。駒澤大学仏

教学部仏教学科を中退。昭和五十七年(一九八二)三月、特派布教師を拝命した。「生かされている実感を喜び精進」(『慕古の心法話集』大本山永平寺)「わが本師花本貫瑞老漢」(『空心静坐』黙仙寺)「法雄和尚を思う」(『愛憎超越』興徳寺)「初盆説教——親先祖を敬う」(『活捉瞿曇』黙仙寺)などの論稿がある。平成十一年九月二十七日に七十八歳で示寂した。

あべーしんりゅう 阿部信隆

明治三十四年(一九〇二)ー昭和五十八年(一九八三)

愛媛県越智郡禅興寺十七世。号は碧堂。明治三十四年四月一日に北海道函館市湯川の阿部浅五郎の次男に生まれる。幼名は久吉。受業師及び本師は村上太信。昭和二年(一九二七)三月、曹洞宗大学を卒業し愛媛県瑞応寺専門僧堂に安居する。四年四月、禅興寺書道学校を設立した。同年三月には青少年保護司に就き、十六年九月三日

に禅興寺へ住職する。二十三年四月十日より永平寺貫首熊沢泰禅を戒師に迎え、授戒会を修した。三十三年に越智郡仏教団長、四十六年に四国総和会支部長などを務め、五十五年夏、本堂大屋根瓦葺替、庫裡修理を行った。昭和五十八年九月八日に八十二歳で示寂した。(『禅興寺歴任世代帳』)

あべーぜんがく 阿部善覚

明治二年(一八六九)ー昭和二年(一九二七)

水沢市大林寺二十八世、岩手県中興寺十二世。号は天山、戸籍は禅覚、明治二年九月、岩手県紫波郡赤石村に生まれる。受業師、本師は阿部禅法。阿部善英や穂積豊年らに参随する。十七年(一八八四)岩手県曹洞専門支校を卒業した。翌十八年県立盛岡中学に入学、四十二年直命一等布教師になり、各県下を巡教し宗門第一流の布道家と称せられた。大正七年(一九一八)六月より宗会議員を二期務め、十二年私立幼稚園を設立した。永平寺禅師随行長として数回補佐している。昭和二年九月二十五日に

六十歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』、『現代仏教家人名辞典』、『宗教時報』第四十九号)

あべーだいかん 阿部大環

嘉永六年(一八五三)ー昭和八年(一九三三)

盛岡市源勝寺三十一世、岩手県龍泉寺二十世。号は祖嶽。嘉永六年六月七日に生まれる。本師は可学祖文、明治二十二年(一八八九)六月二十六日末派総代議員になり、曹洞宗大会議の会頭となる。十二月十五日曹洞宗末派総代委員に当選。岩手保護院創立の中心的役割をなし、三十九年一月には岩手保護院理事長、大正三年(一九一四)八月四日には同院長に就任した。昭和八年七月二十三日に八十一歳で示寂した。(『曹洞宗年鑑』、『現代仏教家人名辞典』)

あべーどうざん 阿部道山

明治二十九年(一八九六)ー昭和五十三年(一九七八)

大宮市普門院四十二世。号は道山。本名は

唯一。明治二十九年十一月二十日に東京都本所区向島に生まれる。受業師は安達東山。本師は岩本国宗。大正十年(一九二一)三月十五日に曹洞宗大学本科を卒業。

十四年五月に普門院へ住職。十四年三月一日に埼玉県曹洞宗布教管理を任命され、昭和十三年(一九三八)七月一日より十六年四月まで埼玉県宗務所に任命される。十七年五月には曹洞宗会議員に当選し、二十一年六月には曹洞宗特選議員に任命され、二十二年四月に曹洞宗社会部長兼教学部長を務める。二十二年十二月に駒澤大学視学委員及び駒澤大学査察使を拝命し、翌二十三年三月に任務完了して辞職する。同年四月には学校法人普門院幼稚園を開設し、理事長兼園長を務める。二十六年五月に埼玉県私立幼稚園協会副会長、二十九年四月より埼玉県科学審議会委員、三十二年三月に大宮市文化財専門委員長、三十三年三月には埼玉県文化財保護協会副会長、三十八年四月より埼玉県文化団体連合会副会長、会長、大宮市大成地区水道架設組合長、大宮市社会教育委員長、大宮市文化財保護委員長な

ども務めた。著書に『小栗上野介正伝』（昭和十六年十月 海軍有終会）がある。昭和五十三年六月十三日に示寂した。

あべーはくほう 阿部博邦

明治四十四年（一九一〇）ー福寿無量

山形県東田川郡乗慶寺三十五世、山形県東田川郡萬福寺十一世。号は大耕。明治四十四年十一月二十八日に山形県東田川郡余目町に生まれる。受業師、本師は阿部得髓。

昭和九年（一九三四）、駒澤大学人文学部を卒業。三十一年十一月に山形県第三曹洞宗宗務所長就任、四十一年曹洞宗議会議員に当選し五十六年十月に退任、五十七年より平成九年（一九九七）まで總持寺顧問、

昭和六十一年五月より平成二年四月まで總持寺副監院、平成七年より九年まで總持寺嶽山会会長、昭和二十四年十一月より三十七年まで保護司を務めた。曹洞宗議会議員在職中の昭和四十六年一月に社会部長に、五十三年には教学部長に補任され、駒澤大学、愛知学院大学、東北福祉大学、世田谷高校、多々羅高校などの理事を兼任した。

平成六年には總持寺授戒会の教授師、九年の總持寺副貫首本葬の入龕師を務めた。

あべーぶんゆう 阿部文雄

明治十七年（一八八四）ー昭和五十二年（一九七七）

宮古市常安寺二十二世、岩手県下閉伊郡常運寺三世、岩手県下閉伊郡好心寺二十三世、岩手県下閉伊郡宝福寺中興開山。号は意参。明治十七年十二月二十五日に盛岡市大沢川原に生まれる。受業師、本師は高橋超三。明治四十五年（一九一〇）曹洞宗大学を卒業し、大正五年（一九一六）、東京帝国大学梵文選科を卒業、十二年、東京帝国大学文学部英文学科を卒業した。五年より河口慧海に就て西蔵語学を修学し、九年より十三年まで世田谷中学教諭を務め、昭和四年（一九二九）より十六年まで駒澤大学講師、十五年より十九年までは梅檀中学学長を務めた。昭和三年より八年までは東洋大学梵語科教授を務め、十八年より二十

年まで東北大学文学部の西蔵語講師、二十三年より宮古市公安委員長を務める。常安

寺保育園を創設しており、『チベット語文典』を著わした。昭和五十二年六月三日に九十四歳で示寂している。

あべーりようどう 阿部諒童

明治四十一年（一九〇八）ー昭和五十六年（一九八一）

宇都宮市林松寺十九世。号は天瑞。明治四十一年十月十三日に栃木県上都賀郡真名古に生まれる。受業師、本師は阿部秀苗。昭和六年（一九三一）に駒澤大学仏教学科を卒業し管内布教師、布教委員、中外日報記者、宇都宮実業学校教諭、元陸軍嘱託教官、民生委員、教誨師、保護司、宇都宮市教育委員、宇都宮刑務所篤志面接委員、宇都宮地方裁判所調停委員、宇都宮市社会教育委員、県仏教会理事兼事務局長、中外日報栃木支局長、宇都宮市仏教会会長などを務める。昭和五十六年十月三日に七十三歳で示寂した。

あべーれいじゅん 阿部豊純

ー昭和六年（一九三一）

盛岡市祇陀寺二十一世、岩手県紫波郡勝源院二十世、岩手県東磐井郡大光寺二十世、青森県三戸郡名川町東円寺十二世。号は柏要。岩手県盛岡に生まれる。受業師、本師は狐崎靈道。専門支校を卒業して可睡斎の西有穆山に参随し立身する。宗議会特選議員、岩手県布教部委員長、管内布教師、岩手保護院長などを務める。昭和六年八月二十三日に八十歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』、『曹洞宗名鑑』)

あまういせいりゆう 天雨清隆

明治四十四年(一九一〇)ー福寿無量
佐世保市興龍寺四世、佐賀県三養基郡栄福寺十五世。号は貫道。明治四十四年三月七日に長崎県北松浦郡小佐々町田原の細川左三郎の次男に生まれる。昭和三十二年(一九五七)四月に天雨家の養子になる。受業師、本師は隆邦篤孝。中村応隆、村上素道に参随した。大正十三年(一九二四)四月一日より僧堂許可禅林を卒え、長崎皓台寺専門僧堂に三年間安居する。昭和二十七年に興龍寺を移転改築し、三十九年十月より

佐世保市供会連盟会長及び佐世保童和会を十五年間務めた。平成十年(一九九八)十月に退堂した。

あまおかーだいき 天岡大器

明治二十七年(一八九四)ー昭和三十八年(一九六三)

大田市栄泉寺二十三世。号は慈芳。明治二十七年九月十六日に島根県大田市久利町松代三十四番地に生まれる。本師は赤松慈潭。東洋大学学部第二科を修学し、龍泰寺認可僧堂に安居する。樺太駐在布教師、樺太布教総監部主事、樺太布教総監事務取扱、警察布教師、両大本山巡回布教師、軍人布教師、特派布教師、曹洞宗報国会本部常任講師、樺太太泊女子職業学校長、東洋大学嘱託、北海道帝国大学禅学講座講師、司法保護委員、保護司、大森町教育委員会委員長、大森町議会議長、大田市保護司会長、民生委員協議会長、大田市立大森公民館長などを務めた。『雄弁法と司会法』を著わしており、昭和三十八年十二月三十一日に示寂した。

あまおかーほうせん 天岡芳仙

元治元年(一八六四)ー昭和七年(一九三二)

池田市陽松庵三十一世、亀岡市曹流寺、守口市金龍寺。号は古澗。元治元年八月二十七日に兵庫県川西市平野の塩川光藏の長男に生まれる。俗姓は初め塩川といい、後に天岡と改称した。受業師、本師は天岡桂巖。北野吾有、西野石梁に参随した。明治十三年(一八八〇)から二十年まで蔭涼寺に安居、二十四年(一八九二)より二十九年まで興聖寺に安居する。三十六年六月に陽松庵へ晋住した後、三十八年十月には古道場再興のための驢耳会を組織し、四十年には陽松庵に認可僧堂を開単した。四十四年に師家に認可され、昭和七年三月八日に六十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

あまじーへきたん 天地碧潭

文政三年(一八二〇)ー明治十二年(一八七九)

三原市宗光寺二十三世、愛媛県越智郡宝蔵寺十二世。号は碧潭、名は老龍。文政三年

誌)

一月八日に広島県御調郡丸河南村の小林友右エ門の子に生まれる。受業師は寿山泰量、本師は佛慧環道。風外本高に参随した。天保元年(一八三〇)、十一歳で行脚し、播州明石郡人丸町の雲晴寺に安居した。宗光寺では西国三十三霊場の石像を境内の山へ列置しており、明治十二年十月二日に六十歳で示寂した。(宗光寺歴住世代帳)

あまつゝえんしゅう 天津円宗

あまじーゆうしょう 天地有生

明治十八年(一八八五)ー昭和四十一年(一九六六)

三原市宗光寺二十五世、尾道市西金寺十三世。号は虎山。慶応二年六月十八日に三原の丹羽亀の次男に生まれる。碧潭老龍について得度し、俗姓を丹羽から天地と改称した。本師は月潭掉舟。明治三十四年(一九〇一)十二月、宗光寺に住職した。住山後、予州の寺院へ助化応請中、病を得て三十六年三月十七日に三十八歳で示寂した。温容慈顔、能弁宏辞と称され、至る所で道俗の帰崇があった。(有木環山『三刹法流

太田市浄光寺二十三世、号は白道。明治十八年一月十日に茨城県水戸市大字上市天王町の興津良承の二男に生まれる。受業師、本師は天津円忠。明治二十四年(一八九一)三月二十七日に茨城県上市尋常小学校を修業し、三十三年十月一日より三十六年十月一日まで、栃木県下都賀郡の大中寺に安居する。四十四年群馬県第五曹洞宗務所管内布教委員、大正十四年(一九一五)七月六日には社会事業布教師、昭和十五年(一九四〇)二月二十日に司法保護委員、二十六年六月二十日に高祖大師七百回大遠忌勸募専使などを務め、昭和四十一年三月十八日に八十二歳で示寂した。

あまのゝえんしゅう 天野延秋

明治二十八年(一八九五)ー昭和五十八年(一九八三)

沼田市舒林寺三十三世。号は大信。明治二十八年十二月三十日に山梨県東山梨郡岡部村に生まれる。本師は佐藤鉄額。北野元峰に参随する。大正十二年(一九二三)曹洞宗大学を卒業。昭和四年(一九二九)舒林寺、十五年音昌寺住職となる。宗務所長、管内布教師、布教委員、永平寺地方副監院、教区長、審事院審事、司法保護委員、保護司、前橋裁判所参与、各種調停委員、沼田市更生委員、沼田市公安委員、県更生保護事業協会評議員、民生委員推薦委員などを務め、昭和五十八年八月二十八日に八十九歳で示寂した。

あめみやーぎげん 雨宮義憲

明治二十二年(一八八九)ー昭和三十五年(一九六〇)

あまのゝえんしゅう 天野延秋

明治二十八年(一八九五)ー昭和五十八年(一九八三)

奈良県吉野郡蔵心寺二十四世、門真市安養寺二十三世。号は大法。明治二十二年四月十五日に山梨県中巨摩郡龍王町龍王の雨宮徳太郎の長男に生まれる。受業師、本師は尾崎桂印。西野石梁に参随している。明治四十一年(一九〇八)第三中学林を卒業

し、大正二年（一九一三）曹洞宗大学を卒業した。宇治興聖寺の僧堂に安居する。大正二年門真市の安養寺住職、昭和二年（一九二七）蔵心寺住職を務め、曹洞宗大学寮監、副学監、駒澤大学監事に就き、奈良県保護司、方面委員、民生委員、司法保護委員なども務めて三十五年十二月二十日に七十二歳で示寂した。

あらいーかくぜん 新井覚禅
ー昭和十四年（一九三九）
横浜市福泉寺二十六世、春日部市浄春院三十二世、号は真法。福島県に生まれる。本師は新井石禅。数々の奇行があり凡骨を脱した和尚といわれ、昭和十四年二月二十二日に六十二歳で浄春院において示寂した。
（瀧田空華庵「新井覚禅和尚を憶ふ」（大乗禅）第十七卷第七号）

あらいーかつぎゅう 荒井活牛
ー明治三十六年（一九〇三）
白根市永安寺十九世、五泉市瑞祥寺十五世。号は鉄学。扶宗会第一一二号社長を務

めている。明治三十六年一月十日に示寂した。